

原 罪 下

P・D・ジェームズ 青木久恵訳

1630

TOKYO
HAYAKAWA
BOOKS



青 木 久 恵
あお き ひさ え

この本の型は、縦18.4センチ、横10.6センチのポケット・ブック判です。

1966年早稲田大学文学部英文科卒
英米文学翻訳家
訳書

『策謀と欲望』P・D・ジェイムズ

『遺骨』アーロン・エルキンズ

(以上早川書房刊) 他多数

検 印
廃 止

〔^{げん}原 ^{ざい}罪〕
〈下〉

1995年12月10日印刷

1995年12月15日発行

著 者 P・D・ジェイムズ

訳 者 青 木 久 恵

発 行 者 早 川 浩

印 刷 所 星野精版印刷株式会社

表紙印刷 大平舎美術印刷

製 本 所 株式会社川島製本所

発 行 所 株式会社 早 川 書 房

東京都千代田区神田多町2ノ2

電話 03-3252-3111 (大代表)

振替 00160-3-47799

〔乱丁・落丁本は小社制作部宛お送り下さい〕
〔送料小社負担にてお取りかえいたします〕

ISBN4-15-001630-5 C0297

Printed and bound in Japan

原 罪 下

P・D・ジェームズ 青木久恵訳

1630

TOKYO
HAYAKAWA
BOOKS

院图书馆
章

ORIGINAL SIN

ワ・ミステリ

30-5 C0297 P1000E

出版社の社屋の売却計画に反対する共同経営者、解雇を言い渡された社員、自作の出版を断わられたミステリ作家、長い交際の末、捨てられた恋人……捜査を始めたダルグリッシュ警視長は、殺されたジェラルルがあまりに多くの人間を敵に回していたことを知る。若く野心に燃える彼は、自らの出世と保身のためには手段を選ばぬ冷徹な男だったらしい。さらに、ジェラルルが社長に就任してから、社内では原稿や原画が紛失するトラブルや、社員が自殺するという不祥事が続いていた事実も浮かび上がってきた。長い伝統を誇る名門出版社には、いったい何が潜んでいるというのか？ 複雑な人間関係の中に踏み入って粘り強い捜査を続けるダルグリッシュ警視長。しかし、やがて第二、第三の惨劇が起こるに及び、事件はますます複雑な様相を……。

現代ミステリ界の頂点に立つ著者が、人間の犯した罪とは何か、罪の償いとは何かを問う本格巨篇。



P・D・ジェイムズ

© Stephen Shakeshaft arranged
through Elaine Greene Ltd.
© Hayakawa Publishing, Inc.

〈著者紹介〉1920年オックスフォード生まれ。62年の『女の顔を覆え』でデビュー。代表作に『女には向かない職業』『死の味』などがあり、英国推理作家協会賞に四度にわたって輝いている。

定価 1000円 (本体971円)

Hayakawa Publishing, Inc.

・ミステリ

P. D. JAMES

原 罪

〔下〕

ORIGINAL SIN

P・D・ジェイムズ

青木久恵訳

A HAYAKAWA

POCKET MYSTERY BOOK

日本語版翻訳権独占
早川書房

© 1995 Hayakawa Publishing, Inc.

ORIGINAL SIN

by

P. D. JAMES

Copyright © 1994 by

P. D. JAMES

Translated by

HISAE AOKI

First published 1995 in Japan by
HAYAKAWA PUBLISHING, INC.

This book is published in Japan by
arrangement with

GREENE & HEATON LTD.

through TUTTLE-MORI AGENCY, INC., TOKYO.

目次

第二章	出版業者の死（承前）	九
第三章	捜査の進展	三五
第四章	書かれた証拠	一九
第五章	最後の立証	三七
解説		二七五

原

罪

〔下〕

登場人物

- マンディ・プライス……………速記タイピスト
- ジェラルド・エティエンヌ……………〈ペヴァレル出版〉会長兼社長
- クロード・エティエンヌ……………ジェラルドの妹。同役員
- ゲイブリエル・ドーンツイ }
ジェームズ・ド・ウィット } ……〈ペヴァレル出版〉役員
フランセス・ペヴァレル }
- ブラキット……………秘書
- ソニア・クレメンツ……………編集主任
- シドニー・バートラム……………経理部社員
- エイミー・ホールデン……………広告部社員
- ジョージ・コーブランド……………電話交換係
- デマリー……………掃除係
- ヘンリー・ペヴァレル }
ジャン・フィリップ・ } ……〈ペヴァレル出版〉もと経営者
エティエンヌ }
- フレッド・ボーリング……………ランチの船長
- スティルゴ・卿……………政治家
- ジョーン・ウィラビー……………ブラキットのいとこ
- ルパート・ファーロー……………作家。ド・ウィットの友人
- デ克蘭・カートライト……………クロードの愛人
- ルシンダ・ノリントン……………ジェラルドの婚約者
- エズミ・カーリング……………ミステリ作家
- ケイト・スキーン }
ダニエル・アロン } ……警部
- アダム・ダルグリッシュ……………警視長

第二章

出版業者の死（承前）

ワッピング警察署の街路側の出入口は、知らない者なら見落とすほどおおよそ目立たなかった。テムズ川から見ると、好感のもてる控え目なレンガ造りの正面と川を見晴らす出窓の家庭的な雰囲気から、造りのいい古い建物であることが倉庫の上を住居にした十八世紀の商人の住いだったことがうかがい知れる。ダニエルは捜査本部の部屋の窓際に立つて、広いスロープを見下ろしていた。浮き棧橋の作る入江に警察のランチが係留され、溺死体の収容と水洗いに使われるステンレス製の舟型担架が目立たないように置いてある。川を行き来する目ざとい人でも、この建物の機能に気づく者はそうはいないだろう。

ロビンズ部長刑事と一緒にここに来たダニエルは、駐車場を通り抜け、鉄階段を昇って署の押し殺したようなあわただしさの中に身をゆだねて以来、働き通しだった。コンピュータをセットし、ダルグリッシュと自分、それにケイトが使う机を用意してから、検死解剖と検死審問の打ち合わせを検死官とした。法医学研究所とも連絡をとった。現場の写真が掲示板に留めてある。陰影のない、殺伐とした鮮明さのおかげで、恐ろしさは撮影技術の練習台にすり替わっていた。ダニエルはロンドン・クリニックの個室でステイルゴー卿にも面会した。全身麻酔を受け、看護婦のやさしい看護、次々訪れる見舞客に気をよくした卿は、殺人事件から少しの間気がそれていた。ダニエルの報告を意外なほど冷静に受けとめて、ダルグリッシュが直接病室に出向くべきだとは言い張らなかった。首都圏警察の広報部にも状況の説明をしておいた。マスコミが動き出せば、広報部が記者会見を設定し、マスコミとの連絡に当たることになる。警察としては捜査の都合上公表するつもりのない事件の細部が数々あるのだが、蛇の異様な使われ方は遅く

とも明日にはイノセント・ハウス全体に知れ渡るだろうし、数時間もすれば、ロンドンじゅうの出版社の知るところとなり、マスコミもキャッチする。広報部は忙しくなるだろう。

ロビンズがそばにやってきた。上司がぼんやりしているのを見て、休憩するチャンスと思ったのだろう。「ここは面白いですね。イギリスで一番古い警察署ですよ」

「河川警察が首都圏警察より三十一年も前の一七九八年に作られたと言いたいんなら、あいにくだが、知っているよ」

「ここの博物館をご覧になりましたか。古い造船所の大工作業所にあるんですけどね、基礎訓練学校の時に見学させられたんですよ。面白い展示品があるんです。鉄の足かせとか、警官用のそり身の短剣とか、昔の制服、医者診察道具を入れる箱、十九世紀初頭の書類やプリンセス・アリス号沈没の記録なんか。いい物を集めてますよ」

「あまり歓迎してもらえないのはそのせいじゃないのか。首都圏警察の博物館が食指を動かして、ぼくたちに目

玉の展示品を持っていられるんじゃないかと疑っているのさ。だが、ぼくはああいう新しいやつの方がいいな」

眼下では川面が泡を立てて騒いでいる。明るいオレンジ色、黒、グレーに塗り分けられた半硬膨脹式高速ボートが二隻、ヘルメットをかぶり、蛍光グリーンのジャケットを着たクルー二人を乗せて、まるで危険な大人の玩具のように警察ランチの間を滑り、曲がり、めぐってから、下流に走り去った。

ロビンズが言った。「シートがないですよ。ああ後に引っ張られては、筋肉がたまらないんじゃないかな。四十ノット近く出るはずですよ。博物館をまたのぞく時間がありますかねえ」

「まあ、無理じゃないかな」

ダニエルに言わせれば、新設大学で歴史学を専攻して、卒業後まっすぐ警察入りしたロビンズ部長刑事は出来すぎといった感じだった。どんな母親の愛情も一人占めする、典型的な最愛の息子タイプだった。さわやかな容姿とがむしやらさを感じさせない野心、メソジストとして信仰も篤

い。同じ教会に通う娘と婚約しているという噂だった。清らかな婚約期間のあと結婚して、立派な子供を生むことだろう。子供はきちんとした学校に入り、試験もきちんとパスし、両親を悲しませたり、悩ませたりしない。そして教師かソーシャル・ワーカー、あるいはもしかしたら警官になつて、よかれと思つて他人に干渉するようになるのだ。ダニエルから見れば、ロビンスは警官の暴力に訴えやすいマッチョ的体質や避けて通れない妥協、ごまかしに幻滅して、あるいは薄っぺらな犯罪や他人に対する非人間的行為を日ごと見せつけられる警官という職業そのものに嫌気がさして、とつくのとうに退職して当然だった。ところがけろりとしているし、理想も失っていないようだ。やつにも秘密の部分があるにちがいないとダニエルは睨んでいた。人間なら普通あるものだ。まったくなしで生きるなど不可能だ。しかしロビンスは秘密の部分を隠すのが特別うまいらしい。内務省も彼に全国の学校を行脚させて、理想に燃える卒業予定者に警官稼業の素晴らしさを宣伝させれば、成果が上がるだろうにとダニエルは思うのだった。

二人は仕事に戻った。まもなく遺体安置所に行かなければならないが、寸暇といえど無駄にできない。ダニエルは机に着いて、エティエンヌの書類に目を通した。一わたりざっと見ただけでも、ジェラルド・エティエンヌがかかえていた仕事の量に驚かされた。会社は総数三十名のスタッフで年間約六十冊の本を出版している。ダニエルは出版業に疎かった。この出版点数が平均的かどうかかわからないが、経営管理体制が変則的で、エティエンヌの負担が不釣り合いに大きい。ド・ウィットは編集長で、ゲイブリエル・ドーンツイが詩担当編集長としてド・ウィットを補佐する任にあるが、詩の編集以外は書庫で自分の仕事をする以外はとくに何もしていないらしい。クロード・ディア・エティエンヌは人事と販売、広告を担当している。フランセス・ペヴァレルは契約と著作権担当だった。会長兼社長のジェラルド・エティエンヌは制作、経理、倉庫にも目を光らせ、負担は群を抜いて重い。

ダニエルはエティエンヌがイノセント・ハウス売却計画をどの程度推し進めているかにも興味をもった。ヘクター

・スコリングとの交渉は何カ月も前から進められ、すでにかなり煮つまっている。月例の経営幹部会議の議事録に目を通すと、その間の事情に触れている部分がほとんどない。ダルグリッシュとケイトが正式な事情聴取にかかりきっている間に、ダニエルはデマリー夫人のおしゃべりに耳を傾け、ジョージや社内にいる少数の社員から話を聞いて、ほぼ同様の内容を仕入れていた。共同経営者たちとしては共通の目的に向かって足並みを揃える重役会といったイメージを前面に出したいのだろうが、これまでの証言では現実とはまるで違った。

電話が鳴った。ケイトだった。フラットに帰って、着替えをしてみると言う。ダルグリッシュは警視庁に呼ばれていた。二人は、遺体安置所でダニエルと落ち合うことにしていた。

33

地元の遺体安置所は最近改修されたが、外観はそのままだった。短い袋小路の突き当たりの灰色のレンガ造りの平屋で、前庭は高さ八フィートの塀で囲まれている。掲示板や住所表示にも建物の機能を物語るものはない。そこに用のある人は、先刻知っているということなのだろう。好奇心の強い人の目には、商品を目立たないワゴン車で運んできて、こっそり荷下ろしする、業績の振るわない会社といった印象だろう。ドアの右側に葬儀社のワゴン車が二台納まるガレージがあつて、そこから観音開きの扉を入ると、狭いロビーになっている。左側が待合室だった。六時二十九分に着いたダルグリッシュは、すでにそこで待っていたケイトとダニエルに合流した。待合室は低い丸テーブルと四脚の楽な椅子、大型テレビで過ごしやすいうに工夫さ

れている。テレビはダルグリツシュの見たかぎり、いつもついていた。あるいは娯楽のためでなく、治療が目的なのかもしれない。余暇がいつ取れるか予想のつかない研究所の技官たちには、たとえ短時間であろうと、静かに朽ちてゆく死体の代わりに、生きている世界の華やかな虚像が必要なのではないか。

ダルグリツシュはケイトがいつも着ているツイードの上着とパンツをジーンズの上下に着替えているのに気がついた。太いお下げに編んだ金髪は、乗馬用のキャップに押しこんである。着替えた理由はわかっていた。ダルグリツシュもラフな格好をしている。消毒薬のほんのり甘い柑橘系の臭いは、三十分もすると感じなくなるのだが、衣類には何日も残って、洋服ダンスに死臭をうつす。洗濯機に即座に放りこめないものは身に着けないと早くから習いおぼえた。洗濯機を回している間に、思いきりシャワーを浴びる。湯の勢いでこの二時間に見た光景、かいだ臭い以上のものを物理的に洗い流そうと、噴き出す湯を顔で受ける。八時に下院の大臣室で警視總監と会うことになっている。それ

までにクイーンハイズのフラットに帰って、シャワーを浴びる時間を何とか作らなければならない。

刑事になりたての頃に初めて立ち合った解剖が目の裏に灼きついている——忘れられるものではなかった。殺された被害者は二十二歳の売春婦だった。警察は親類や親しい友人をなかなか見つけられず、身元の確認に手こずった。台の上に横たえられ、聖痕のような紫色のみみず腫れの鞭の跡をつけた栄養不良の遺体は、青白く硬直して男の非人間性を無言で立証していた。役人が詰めかけてごった返す解剖室を見回して、ダルグリツシュは思ったものだ。生前は国家の役人から顧みられることのなかった売春婦テリーザ・バーンズも、死後は関心の的だ。担当の検死医はマグレガー医師だった。古いタイプの徹底した個人主義者で、自分が執刀する解剖はすべて、物理的とは言わないまでも、精神的聖域の雰囲気の中で行なわれなければならないと主張する、こちこちの長老派教会の信者でもあった。一人の技官が同僚のつぶやいた洒落に短く笑い声を上げたのを聞きつけた彼が怒ったことがあった。「私の解剖室では笑わ